

## 教職インターンシップの目指すもの

土屋 弥生<sup>1)</sup>

### I はじめに

日本大学文理学部における「教職インターンシップ」は、将来教育現場で活躍できる教員の養成を目指して、平成23年度から文理学部と聖パウロ学園高等学校エンカレッジコースが連携して実施している。

教員養成教育におけるインターンシップの導入の背景には、学問知と実践知の乖離という問題がある。大学で学んだ知識を実際の教育現場で生かしていくためには、知識を実践へと移行、または反映させていく力が必要となる。学生が大学で学ぶ知識、すなわち学問知は、就職した企業などの実践現場で養成され活用される知識である実践知と乖離するものと考えられてきた(田島, 2016)。

実際の教育現場には、複雑かつ多様な問題が山積している。それらに正面から責任を持って関わり、解決していくのが教師の役目であるが、それらの問題について知識のみによって臨むことは不可能であることは言うまでもない。生徒指導も教科指導も保護者対応も一筋縄ではいかない、困難なことがらである。多くの知識を用いればこれらのことがらに十分に対応できるということには、けしてならない。学生は卒業後、社会に出て働くにあたり、大学という場と現実の実践の場の大きなギャップを実感することになる。

中央教育審議会の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」(2012)には、教職課程におけるカリキュラムの中に「学校インターンシップ」を導入していく方向性が明記されている。教育現場における実践知の獲得については、教師という職業に就いてから始めるものではなく、その準備教育の段階か

ら導入することが重視されるようになっている。確かに、「現場主義の弊害」が指摘される(油布, 2013)が、大学と教育現場のギャップ、そして学問知と実践知のあいだにある溝を埋めていく試みは教師が力を発揮していくために重要である。それが文理学部の「教職インターンシップ」に課せられた役割のひとつである。

### II 教職インターンシップにおける学び

教育現場は、教師が専門的な力をもって対応しなければならぬことがらばかりであり、複雑で多様な状況の中で問題を解決していくためには「実践知」をもって臨まなければならない。つまり、教職は、免許を持っているだけではとまらない、本来は「誰にもとまらない専門職(impossible profession)」である(佐藤, 2015)。

例えば、教育現場には学校に不適應の状態にある生徒が存在するが、課題を抱える生徒への対応については特に、担任や教科担当者として何ができるかが問われることになる。その場合、大切なのは「その生徒と保護者にとって何が必要なのかを見きわめて接すること」であり、教師は多種多様な状況にある生徒に出会ったとき、余裕をもって導くことが望まれているし、余裕がなければ導くことはできない。つまり、教師という専門職にあつて教育に携わる者には、「その人のために何ができるのか」がいつでも問われていると言えよう。

このような役割を果たすために教師に必要な実践知については、さまざまな見解(石田, 2014; 時田, 2009)があるだろう。「教職インターンシップ」では、参加した学生たちが、実際の教育現場

1) 聖パウロ学園高等学校エンカレッジコース

に立つにあたってこのような力が必要であるということに気づき、実践知を育むことの重要性を認識することを目指すとともに、そのためには反省的実践を心がけることが必要であることを学ぶ。

ショーン(2001)はこれからの大学は、専門職の「実践」というものを研究のための問題の源や学生のインターンシップ先としてだけではなく、反省的実践にアクセスするための源として関心を持ち始めるだろうとしている。文理学部では、専門職の実践と学生たちをつなげる場を創造することで、従来おこなわれてきた「就業体験」としてのインターンシップを上回る成果が期待できるのではないかと考え、教職を志望する学生が反省的実践について学ぶ機会として新たな「教職インターンシップ」を構築してきた。

### Ⅲ 文理学部における教職インターンシップ

文理学部教職支援センターがおこなっている、聖パウロ学園高等学校エンカレッジコースにおける「教職インターンシップ」の目的は、将来教師として現場で活躍するにあたっての基礎的な力を養成することにある。エンカレッジコースでは、不登校を経験している生徒や発達に課題がある生徒も受け入れて、普通教育の枠組みで教育活動をおこなっている。学校への不適応を起こしている生徒についても積極的に指導をおこなっていて、そこでの教育を通して多くの生徒たちが不適応を乗り越え、新たな道を歩んでいる。課題を抱えた生徒たちが再び歩み始める教育現場で、学生たちは教師がどんな試みをおこなっているのかを見て、その教育活動の「意味」について考えることができる。

「教職インターンシップ」においては、現代社会における幅広い特徴をもつ生徒たちの実態に触れ、その生徒たちの本質を教師として「見抜く」ことを学ぶ。課題を抱えた生徒たちの状況を改善し、成長に導く過程の中では、細かい配慮と工夫が必要となる。教師による配慮と工夫は、その生徒の課題の本質をとらえ、的確な指導方法を考え出すという実践の中でなされるものであり、その原点には「生徒を見る」ということがある。そのため、「教職インターンシップ」においては「生

徒を見る」ために必要なことは何か、そして「生徒を見る」ということは実際にはどのようなことなのかを学ぶことに主眼をおいている。

「教職インターンシップ」は、①生徒の活動を見る、②生徒の活動の特徴をとらえる、③生徒の活動の意味を考える、④生徒に必要なことは何かを考える、⑤生徒に指導する方法やタイミングを考える、⑥生徒への指導を実践してみるといった段階を踏むようにプログラムされている。前期と後期にそれぞれ実施される「教職インターンシップ」において、学生は、まず前期に「生徒を見る」ということについて知るために、以上にあげたプログラムの①から③を中心にインターンシップをおこなう。後期は「生徒を見る」ことがどのように教育実践の場につながるのかを指導実践を通して学ぶために、学生は、①から③のプログラムに加えて、④から⑥のプログラムを実践してみる。このように後期のインターンシップは、前期のインターンシップの応用編という位置づけとなっている。なお、前期と後期のそれぞれの「教職インターンシップ」の参加学生数を以下の表に示した。また、学生は実際の教育現場で生徒に触れる前に、多くの事前研修を受けることになっている。インターンシップ前の大学教員による事前ガイダンス、及び聖パウロ学園高等学校インターンシップ担当者による大学での事前ガイダンスでは、インターンシップに参加する前にその目的や意味などを学ぶ。さらに、インターンシップに参加した際には、開始直前に「生徒を見る」ことや実際に関わる生徒の特徴などについて、担当者からの説明があり、そして授業に参加した後はリフレクションとして、実際に教育現場で見てきた生徒の様子や教師の指導についての説明を受け、自分たちが見てきたことからの意味について話し合い、振り返る。「教職インターンシップ」は、教育現場に入って生徒と交流し、教師の教育実践を直接見る機会であるが、それだけにとどまらず、体験したことや目にしたことの意味を反省的に分析するリフレクションをおこなうことで、インターンシップで学んだことが学生自身の中に経験として定着することになる。

表 教職インターンシップ参加学生数<sup>1)</sup>

実施年度	前期	後期
平成23年度	48名	22名
平成24年度	35名	16名
平成25年度	35名	14名
平成26年度	49名	13名
平成27年度	72名	12名
平成28年度	54名	13名

1) 本教職インターンシップは学生の自由意志による参加のため単位を認定していない。

#### IV 教科についてのインターンシップとの違い

「教職インターンシップ」では、体育や農業などの身体活動をともなう授業を対象としている。これはインターンシップを通して生徒理解について学ぶにあたり、身体性に注目し、生徒と活動をともにし、直接かかわることで見えてくることがあるという考えに基づいている。とりわけ不適應の状態にあり、過去に不登校を経験している生徒たちの身体性を通して見えてくる現状は、われわれに多くの示唆を与える。

現在の学校教育の制度の中で、なんらかの不適應を起こしている生徒たちは、学校教育だけでなく現代社会という枠組みの中で不適應を示しているとも言える。つまりそれは、精神と身体の乖離、発達のアンバランスと言い換えられる。

例えば、起立性調節障害や睡眠障害などのように、自らの身体をうまくコントロールできず体調の不調をうったえたり、心身の均衡を保つことができずに安定した生活ができなかったり、聴覚障害や緘黙のように原因不明の機能不全や症状を示したりする生徒たちがいる。身体をともなって生きる人間として、日常生活に大きく支障をきたす場面が出てくることになるが、それは社会生活上深刻な問題である。人間関係も集団での生活も困難になり、不登校やひきこもりの状態に陥ることにもなる。

つまり、不適應の生徒の問題の根底には「身体」ということが大きく関わっていると考えられる。彼らの多くは体育や学校行事など身体を伴う活動に抵抗を感じている。生徒たちを導くためには、そこで現れてくる生徒たちの表情や言動、他

者との関わり方、身体の動きなどに注目し、それが生徒たちの本質とどのように関わっているのかを洞察することが求められる。「教職インターンシップ」では、ここで求められる洞察について、リフレクションの際に担当者から説明を受けることができるので、学生は自分がインターンシップを通して何を学ぶことができたのかを明確にすることができる。

「教職インターンシップ」は、身体活動を観察することにより、「生徒を見る」ことを学ぶことができる点で、一般的におこなわれている教科教育の方法を中心に学ぶインターンシップとは異なる特徴をもつ、生徒指導力という教職の基盤となる部分に焦点をあてたインターンシップであると位置づけることができるであろう。

#### V 今後の課題「学校インターンシップ」の導入を控えて

中央教育審議会の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」(2012)には、教職課程に「学校インターンシップ」を導入することが明記されている。答申には、「各学校種の教職課程の実情等を踏まえ、各教職課程で一律に義務化するのではなく、各大学の判断により教職課程に位置付けられることとする。このため、教育実習の一部に学校インターンシップを充ててもよいこととするとともに、大学独自の科目として設定することも引き続き可能とするなどの方向で制度の具体化を引き続き検討する。」と記されている。

「学校インターンシップ」が、教員養成において実質的な意味を持つためには、これまでの教職課程において不足していたものを補い、現場の実践知を意識したものでなければならない。そのためにも、文理学部がおこなってきた「教職インターンシップ」における実践知の学びを、継続的な形態とし、日常的な実践知に触れていくことができるように工夫していく必要があるであろう。

これまでの「教職インターンシップ」の実績をふまえて検討を重ね、「学校インターンシップ」という新たな試みについて着手していくことが課題となる。

## 文 献

中央教育審議会 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申).  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf)  
(閲覧日2017.3.30)

ドナルド・ショーン, 佐藤 学・秋田喜代美 訳 (2001) 専門家の知恵: 反省的実践家は行為しながら考える. ゆみる出版. p.204.

石田真理子 (2014) 英米における教師教育研究の動向—実践知の継承を中心に—, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第62号第2号, 209-225.

佐藤 学 (2015) 専門家としての教師を育てる: 教師教育改革のグラウンドデザイン. 岩波書店. p.197.

田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚編著 (2016) 学校インターンシップの科学: 大学の学びと現場の実践をつなぐ教育. ナカニシヤ出版. p.1-2.

時田詠子 (2009) 教員養成課程における「実践的指導力」のとらえ方に関する一考察—当事者の捉え方の違いに着目して—, 早稲田大学大学院教育学研究紀要, 17号-1, 249-259.

油布佐和子 (2013) 教師教育の課題—「実践的指導力」の養成の予想される帰結と大学の役割—, 教育学研究, 第80巻第4号: 78-90.